

日本音楽教育学会ニュースレター 第89号

目 次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第53回東京大会のご案内（第2報）……………津田 正之 2
2. 編集委員会からのお知らせ……………今田 匡彦 4

2 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校 (29)
 峯岸一水氏の一絃琴と二人のアメリカ人による尺八の演奏
 ―大震災被災者のために―……………岡崎 淑子 5

3 会員の声

1. パソコンの悩み、そして、ピアノの弾き歌い
 ―小学校共通教材を習ってない！？―……………枡谷 隆男 6
2. 日本音楽教育学会に入会して
 ―オンライン化が進む中で考えたこと―……………齋藤 佑真 7
3. 日本音楽教育学会に入会して……………佐藤真紀乃 8

4 会員の新聞・近刊等紹介…………… 9

5 報告

1. 2022年度 日本音楽教育学会 第2回常任理事会…………… 10

6 事務局より…………… 15

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第53回東京大会のご案内（第2報）

大会実行委員会委員長 津田 正之

第53回東京大会は、11月5日（土）6日（日）の両日、国立音楽大学に実行委員会事務局を置き、オンラインで開催いたします。

本大会では、研究発表（口頭発表、ポスター発表）118件、共同企画16件、実行委員会企画、常任理事会プロジェクト研究を予定しております。充実した大会になるよう、実行委員会一同、本部と連絡を密にしながら、しっかりと準備を整えて参ります。皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。なお、大会及び大会参加の詳細は「申込み用 Web サイト」をご覧ください。

<https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/53ongaku/> 本誌15頁参照

【実行委員会企画】 シンポジウム：ジャズを通して考えるこれからの音楽科教育 —即興、越境するアメリカ音楽をめぐる—

パネリスト：池田 篤（サクソフーズ奏者、国立音楽大学） 志民 一成（国立教育政策研究所他）

高尾 隆（即興演劇研究者、東京工業大学） 花木 洸（音楽ライター・評論家）

演奏：池田篤カルテット：池田 篤（alto sax） 熊谷 ヤスマサ（piano） 金子 健（base）

高橋 徹（drums）

企画・構成：磯田 三津子（埼玉大学） 井上 恵理（国立音楽大学）

津田 正之（国立音楽大学） 森 薫（埼玉大学）

実行委員会企画では、大会実行委員会テーマ「対話する音楽教育—ダイバーシティ&インクルージョンに向けて」を踏まえて、アメリカで生まれ、世界中の国々で展開しているジャズを取り上げます。国立音楽大学ジャズ専修教授である池田篤カルテットによるジャズの演奏を交えながら、ミュージシャン、即興演劇研究者、音楽ライター、音楽教育研究者による対話を通じて、これからの音楽科教育のあり方について考えていきます。シンポジウムは次の二部構成で行います。ご期待ください。



池田篤カルテット

第1部：即興アンサンブルにおける演奏家の思考と相互作用、創発から、音楽科における音楽づくり・創作の学習活動を考える（コーディネーター・司会：森 薫）

第2部：ジャズとアメリカ、文化的なコンテクストに音楽科はどう向き合うかを考える

（コーディネーター・司会：磯田 三津子）

【プロジェクト研究】(常任理事会企画)

生活史の中の音楽と音楽教育 Music in Life History and Music Education —ライフヒストリーとして語られる音楽経験—

企画担当常任理事 今川 恭子・杉江 淑子

常任理事会企画プロジェクト研究は昨年度・一昨年度と、学校の音楽科授業における子どもたちの学びを見つめてきた。そこで今年度から次年度にかけて展開するプロジェクト研究においては、一旦アングルを後ろにひいて学校教育から少し視点を広げて、人の生活経験の中での音楽という観点から音楽教育を捉えてみたい。教育学の分野でとくに教師のライフヒストリー研究で著名な高井良健一氏をお招きしての基調講演「ライフヒストリー／ライフストーリー研究が誘う豊かな学びの世界^{いざな}」を受けて、プロジェクト研究に関わる会員から音楽教育研究におけるライフヒストリーについての報告を行ない、高井良氏から報告へのコメントをいただき、意見交換を行う予定である。

【高井良 健一 (たかいら けんいち) 氏 プロフィール】

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士 (教育学)。現在東京経済大学教授。主な著書に『教師のライフストーリー —高校教師の中年期の危機と再生—』(単著, 勁草書房, 2015 年), 訳書に, アイヴァー・グッドソン, パット・サイクス著『ライフヒストリーの教育学 —実践から方法論まで—』(共訳, 昭和堂, 2006 年)がある。

【院生フォーラム】

音楽教育の研究法を考える

学生代表 山藤 未由 (国立音楽大学大学院) 菅原 成美 (東京学芸大学大学院)
担当実行委員 鯨井 正子 (国立音楽大学) 森尻 有貴 (東京学芸大学)

今回の院生フォーラムは、「音楽教育の研究法を考える」というテーマでディスカッションを行います。音楽教育においても、質的研究や量的研究など研究法は多岐にわたります。研究の目的に適した研究手法を選択できることは研究者として必要なスキルだと考えます。今回は仮の研究テーマを設定し、適した研究法を皆さんで検討することで、自身の研究の方向性や可能性を再考し、また、解決策を見出す機会になればと思います。

参加を希望される方は、右記の Google フォーム (QR コード) にご回答をお願いいたします。



【ポスター発表について】

ポスター発表はフラッシュトーク方式を採用します。フラッシュトークとは、発表者があらかじめ提出した説明用スライド（サムネイル）を提示しながら、司会者の進行により1分以内で発表内容の魅力を参加者にPRするものです。参加者は当該セッション全研究の概要を知ったうえで、興味をもった発表のセッション（Zoomのブレイクアウトルーム）に参加して個別討議を深めます。なおサムネイルスライドの提出要領（提出は10月を予定）等詳細は、大会ホームページでお知らせします。

【日程表】（オンライン開催）

11月5日 (土)	9:00	12:10	13:20	13:50	14:00	16:00	16:10	17:10
	研究発表A～J (口頭発表)		昼休憩	開会式		実行委員会企画		総会
		ポスター発表R 11:40-12:40						

11月6日 (日)	9:00	12:10	13:10	14:50	15:00	16:30
	研究発表K～Q (口頭発表)		昼休憩	常任理事会企画 (プロジェクト研究)		共同企画 VII～XVI (XVIは～16:00)
	共同企画 I,III,V	共同企画 II,IV,VI (VIは -11:40)				
			ポスター発表S 11:40-12:40			
			院生フォーラム 11:40-13:00			

*大会に関わる詳しい情報につきましては、「第53回大会オンライン大会専用Webサイト」を必ずご確認ください。

2. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 今田 匡彦

2022年度第1回編集委員会が5月22日オンラインにて開催されました。『音楽教育学』では13本の投稿論文についての採否が審議され、研究論文2本、研究報告1本、研究動向1本が採択、研究論文1本、研究報告1本が修正再査読となりました。『音楽教育実践ジャーナル』では11本の投稿原稿についての採否が審議され、特集投稿2本、自由投稿4本が採択されました。年間3冊の学会誌刊行は、編集委員13人の体制にあっても決して容易なことではありませんが、質の高い研究論文の創出は学会の重要な責務の一つと考え編集作業を行なっております。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.20の特集テーマは〈部活〉でした。2023年刊行予定の『音楽教育実践ジャーナル』vol.21では、プロの作曲家の手になる作品を、集団で時間をかけて練習し、観客、或いはコンクールの審査員の前で披露する活動ではなく、social inclusion, universal design, 人口減少や貧困・格差問題、今流行りのSDGs等を包摂する〈well-being〉と音楽教育について考えてみたいと思います。音楽教育は万人の幸福のためにどのような役割を果たすべきか、奮ってご提案、ご投稿下さい。正式な特集テーマ及び詳細につきましては8月5日に開催予定の第2回編集委員会で検討し、今秋紙面での案内をみなさまにお届けいたします。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.21の投稿締切は2023年2月15日(水)です。

2 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (29)

1. 峯岸一水氏の一絃琴と二人のアメリカ人による尺八の演奏—大震災被災者のために—

岡崎 淑子（聖心女子大学名誉教授）

私が携わっている聖心女子大学グローバル共生研究所に「グローバル共生セミナー」というプログラムがある。「音楽と共生」もその一つの講座で、世界の楽器の演奏家によるレクチャー・コンサートや、2019年には、来日中のPatricia Campbell先生による、多様な文化的背景をもつ音楽の理解を目指す音楽教育と実践についてのお話など、内容は様々である。今年度は、一絃琴演奏家、峯岸一水氏（清虚洞一絃琴宗家四代）の演奏とお話を企画している。一絃琴は、一本の絹糸を桐の板に張った楽器で、歌いながら演奏する。大勢の聴衆に聴かせるというより、一人静かに演奏する精神修養の楽器とも言われてきた。峯岸一水氏は、二十代の始めという若さで宗家三代の曾祖母様から四代を継ぐようにと遺言を受けられて以来、全く予期しなかったところ、定められた後見の元で熱心に研鑽を積まれ、忠実かつクリエイティブに家元の道を歩んでこられた。宗家四代として清虚洞一絃琴の伝統の本質を守りつつ、アジア、欧米の異なる楽器の演奏家や舞踏家との共演も積極的に行い、国際化した現代に生きた伝統として、一絃琴音楽の表現の幅を広げ深みを探究しておられる。

では「音楽と共生」の講座になぜ一絃琴なのか。この問いに答えるために、峯岸氏から伺ったことを共有させて頂くかたちで述べていきたい。峯岸氏は東日本大震災の後、一絃琴演奏家として被災者のために自分に何ができるか迷っておられた。一絃琴の音楽は静かで厳かなところがあり、被災された方々を元気づけるには相応しくないのではと躊躇されていた。そのとき、十年来の演奏仲間である二人のアメリカ人尺八演奏家、Mr. Ralph SamuelsonとMs. Elizabeth Brownから、日本の被災地でぜひ一絃琴と尺八の演奏をしたいと言われた。Ralphは五十年前の学生時代に日本に住んで日本音楽を学び、山口五郎氏の元で尺八を修得した。Elizabethは作曲家で、来日経験も多く、尺八をRalphから学んで、和楽器のための作品も多く作曲している。英訳された震災短歌からも二種を選んで尺八の曲を作曲した。二人がどうしても日本に来て被災者のために演奏したいと言うのを聴いて一水氏の心は決まり、東北、久慈のお寺で演奏することになった。演奏会の収益で支援するのではなく、被災者の傍らで演奏することが趣旨だった。慈光寺の本堂に集まった約百人の人々は一絃琴と二管の尺八の響きに聴き入った。じっと耳を傾けていた人々から、とても慰められたと感想が述べられた。Ralphは「人々が甚大な悲劇に会って悲嘆にくれているときも、音楽は自分を越えた大きな力を感じさせ、癒す力をもっている」という。自分の間近で演奏される音の響きは、一人一人に寄り添うように聴こえて希望を感じたという声もあった。演奏された曲の一つは、Elizabethが選んだ震災短歌「ふるさは 無音無人の 町になり 地の果てのごと 遠くなりたり」による尺八曲に一絃琴と歌を合わせた曲だった。Elizabethは「歌詞のある曲でも、音楽自体に語る力があり、私たちが演奏した音楽は聴衆を静かに抱きしめていたと思う」と述べた。二人はニューヨークに住んでおり、9.11を経験していることも、大震災を経験した人々と共感したいという気持ちに通じるのでは、と峯岸氏は考察される。

震災短歌「精霊は 月に宿りて 松に降る 陸前高田 秋巡り来て」から生まれた尺八と一絃琴のトリオを聴いた被災者の一人から、新たな短歌「目を瞑り 楽聴きおれば 天界の誰彼となく 微笑みて来る」を贈られたとき、峯岸氏は確かな力を感じたと語られた。この和歌からは暖かい感覚が伝わってくる。音楽が聴衆を寂しく感じさせるよりむしろ、寄り添う音楽に慰める力があり、一つに繋がることができると実感されたのだった。こんなメッセージも受講生と共有できるとよいと思う。

3 会員の声

1. パソコンの悩み、そして、ピアノの弾き歌い—小学校歌唱共通教材を習ってない!?!—

枡谷 隆男（札幌学院大学）

本学会に入会して25年が経ちました。その間、高等学校教諭を2校、幼稚園と認定こども園園長を2園、大学の非常勤講師を6校、兼務しながら経験して昨年度、本学特任教員となりました。社会教育分野では博物館、美術館、生涯学習施設の講座も数多く経験してきました。研究分野は音楽考古学、楽器学、民族学を基軸に、音楽と楽器の起源、世界の諸民族の音楽、日本における西洋音楽の受容、生業（特に狩猟）と音楽の関連、教育楽器の改良（木管リコーダー）等と大風呂敷を広げてきました。

現在の私の頭痛の種はパソコンとピアノです。一昨年、本学教養科目「世界の民族音楽」を非常勤で担当することになった途端、コロナ禍で遠隔授業が始まりました。同時に3大学を兼務し（現在も）、パソコンを所有しない私は各校に出講し、異なるシステムによる遠隔＋対面授業で疲弊しました。

1983年、故郷の北海道北見市で高等学校開校業務に当たった私は、視聴覚担当となりました。数学教室の8ビットのパソコンを操作する中、プログラムによりFM音源で音楽を演奏できることを知り、授業（プログラミングによる創作、リコーダーとの合奏他）に導入しました。翌年、北見で開催された全国視聴覚教育研究大会で研究発表をした際、参加者から「パソコンで音楽授業するのはおかしい」と意見を頂きますが、私は予言しました。「今発言された方、10年後に授業でパソコンを使っています」その後、私は高等学校普通科で必修となる「情報」の研究指定校に赴任することになります。

「便利な道具」パソコンですが、機能を追加し続けて新機種更新を迫られることが当初からわかっていて私は、心を鬼にして携帯電話はガラケー、パソコンを持たずに通して来ました。頭痛の種はこの利器がフリーズすることです。学生の課題にフィードバックすると打ち込めなくなり（学生も課題入力中に同じ現象）、紙上ディスカッションのために課題をオンデマンド資料に取り込むと動かなくなります。この原稿も苦労して打ち込んでいます。昨年購入した研究室のパソコンは買い替えを迫られています。機械の奴隷になって無駄な時間を過ごし、視力が落ち、頭痛と腰痛に悩まされています。

私が小学1年生の時、音楽の授業は大嫌いでした。幼稚園の時は併設の音響の良いチャペルで、いつもオルガンの荘厳な響きに包まれて、讃美歌を楽しく歌っていました。ところが、響かない音楽室では壊れたピアノのように、担任は「ドミソ」の和音だけを弾き、音楽の成績は「1」でした。救世主は5年生の時の担任で、音楽専科でした。私は合唱部と合奏部に入り、ピアノを習い始めました。本学では小学校教諭と保育士養成課程を担当しています。こども発達学科の学生は全て教員志望ですが、「読譜できない」「ピアノが弾けない」「自宅に楽器がない」と3拍子揃っています。全国的な動向ですが、教員採用試験では歌唱共通教材のピアノ弾き歌い実技が廃止されています。本学の「音楽Ⅰ・Ⅱ」は教採対策として置く科目ですが、北海道の小学校ではピアノの弾き歌い能力が無くても教職に就きます。学生には私のような音楽嫌い、歌嫌いを作らないように、実技を身につけるように励ましています。ガイダンスのアンケートでは、彼らは歌唱共通教材の多くを小学校で習ってきていません。100歳の高齢者とともにこぞって歌える「国民の歌」が、ないがしろにされている現実を直視しなければなりません。保育士国家試験にはピアノの弾き歌いが課されますが、保育実習から戻った学生は、ピアノ等を使わずCDで歌わせている保育所の実態を報告します。幼（保）から小と受けるべき音楽教育に触れなかった子どもが、大学に進み教職に就く悪循環を深く考える必要があります。

2. 日本音楽教育学会に入会して一オンライン化が進む中で考えたことー

齋藤 佑真 (弘前大学大学院)

私が日本音楽教育学会に入会したのは約2年前、ちょうどコロナウイルスの流行が始まったばかりの頃である。大学を卒業し、一度社会人として就職した後に学問の世界に戻った私にとっては、この2年というのは長いようでとても短かった。そんな私を日々サポートして下さる先生方や学生の皆さんに、この場をお借りして感謝を申し上げたい。また、当学会を通して他大学や研究機関の方々との交流の機会も少なからずいただいております、現在大変充実した時間を過ごすことが出来ている。

これまで何度か大会等で発表する機会をいただいたが、状況が状況なので、学会の中では一度も対面での交流が行えていないのが現状だ。アカデミックな場というものに慣れていなかった私には、オンラインによる交流はどちらかというと対面よりも気軽に感じられた。私の住む青森の小部屋から手元のPCに目を落とし、イヤフォンを装着するだけで、そこは東京や京都、アジアである。遠くの土地へ行く労力や身嗜み・表情などの身体的要素が、表示される名前だけの参加者と、決して高画質とは言えないライブ映像の時折にじむ画面の歪みによって薄らいた。一方多くの人々が語るように、対面でしか得られない要素も勿論あるのだろう。それはオンラインという形式から生じる、これまでとは異なる制限である。オンラインでの開催が当たり前の状況から学会に参加することになった私は、あまり制限を感じることはない。運営される方々のご苦労は想像に難く無いが、学会の構成や価値をヴァーチャル空間は悉く覆してきた。

私は修士論文で、ITを活用した音楽教育がもたらす変容について、マクルーハンのメディア論とシェーファーのサウンド・エデュケーションを基盤に考察し、博士課程でも継続して研究している。従来の音楽活動と比較して起こる違和感の数々は、これまでの価値に対するものであり、新たな音楽教育の在り方を再考することとなった。そこで見えてきた新たな教育観は、「こうあるべき」を教え諭すようなものではなく、「こうある」を感じる為のものだった。オンライン授業を既知の授業の延長線上で活用しようとする、当然そこには制限が発生する。「音楽」という科目には、進学に必要な試験や基準点も無ければ(音楽大学へ行く場合は別である)、会社や組織に入ってから必要な歌声や超絶技巧も特には無い。そうであれば、他教科に張り合うための存在意義や価値をそこに求めるのではなく、相対的に世界を見つめるための方法論であっても良いはずだ。感染対策の下に導入された技術は、私たちに「音楽」について考える思わぬきっかけを与えてくれたのではないだろうか。「音楽」とは何かが定まらないのだから、音楽教育の可能性は無限大である。

最後に、オンライン上で起こる数々のハプニング、例えばマナーモードにし忘れたスマートフォンの着信音、後ろのドアから突然登場する子ども、不意に聞こえる猫の鳴き声、ミュートにし忘れて話を始める参加者等々、これらは対面の学会では起こり得ない、ある種魅力的な瞬間であるように私には感じられる。第53回大会もオンラインで開催されることになった。大会の本旨とはずれるが、今回は即興音楽ならぬ、どんな即興ハプニングに触れることができるのか少し楽しみである。

3. 日本音楽教育学会に入会して

佐藤 真紀乃（弘前大学大学院）

関東の玉川大学から、東北の弘前大学の大学院に進学して1年以上が経過し、今年で修士課程2年生になった。玉川大学卒業まで実家で生活していたこともあり、初めは慣れない土地での生活から戸惑いも多く、周りの人に助けられながら現在も研究活動が続けることができている。

玉川大学では小学校の教員になるために、小学校の全科、中学校及び高等学校の音楽の教員免許の取得を目指し、教職課程を履修しながら教員になるための勉強をしていた。現場での実践に活かせるように、各教科の指導法、指揮法、伴奏法、理論など、教員になるために必要な知識や技能を講義や実践を通して学びながら、ピアノ、声楽、器楽など、実技に触れる場面も多くあった。また、弘前大学ではこれまでの「教育」という限定されたカテゴリーではなく、「人文社会科学」という今までより幅広い分野について触れることができる機会に恵まれた。初めは財政学や文学、民俗学など、これまでに触れたことがない学問が多く、どのようにして自分の専門と結びつけることができるのか分からずに悩んだこともあったが、講義やレジュメの作成と発表、議論を通し、自身の研究との相関性に気づき、多様な考え方や価値観を身に付けることができた。また、大学院への進学に際して、昨年度に日本音楽教育学会へ入会した。大会や講演会等への参加を通して様々な研究者の発表を拝聴し、音楽教育に対する指摘や、異なる考え方に触れることで、新しい知見を広げ、深めることができる機会となった。まだ入会して日も浅く、本学会での活動経験も多くはないが、今後も積極的に活動に参加しながら、さらに多くの学びを吸収し、研究に活かしていきたいと考えている。

修士論文での私の研究テーマは、音楽科教育の評価についてである。評価について関心をもったのは、玉川大学での中学校の教育実習及び小学校のボランティア活動での2つの出来事が関係している。1つ目の中学校の教育実習では、合唱の授業を行い、合唱の実技試験から指導教員と共に生徒の学習活動の評価をする機会があった。そこでは、各パート2人ずつ計8人のグループで、クラス全員の前で合唱曲を歌い、教員が生徒一人ひとりの前に順番に移動しながら評価していた。そして、その評価は姿勢・音程・リズム・声量・表現の工夫等の項目が設けられ、それぞれを5段階で評価した上で、その総合点から歌の実技を評価するという方法だった。2つ目の小学校のボランティア活動では、鍵盤ハーモニカの授業で児童のサポートをする場面があった。そこでは、教員が教科書の曲を指定し、その曲が演奏できるようになった児童が教員の前に並び、教員が一人ひとりの曲の達成度を聴いた上で、合格した児童は次の曲に進み、不合格だった児童は教員からの合格が得られるまで同じ曲を練習するという授業をしていた。以上の経験から、特定の曲が演奏できたか、できないかで児童生徒の学習活動を数値化し、評価することに教育的な意味が存在するのか疑問を抱き、音楽教育の数値的な評価の必要性や今後の評価の在り方について明らかにしたいと考えたようになった。

現在は、2022年度の第53回大会での発表、そして修士論文の執筆に向けて研究活動に取り組んでいる。玉川大学や弘前大学で学び得たことを研究に活かしながら、日本音楽教育学会への積極的な参加を目指し、研鑽を積んでいきたい。そして、これからの音楽教育の更なる発展を期待し、今後も最善を尽くす所存である。

4 会員の新刊・近刊等紹介

★今 由佳里著『フランス語圏スイスの学校音楽教育』 風間書房 2022/2/15 A5 判・154 頁 ISBN: 978-4-7599-2420-6 [本体 5,500 円+税]

近年、スイスでは大規模な教育改革がなされた。本書は、スイスの公立小学校における音楽教育の全体像が見えるように構成している。また、ジュネーヴの幼児教育においてリトミックとともに影響を及ぼしているヴィレーム・メソッドについても取り上げた。

★中村 ますみ編著/中村 礼香・佐藤 慶治・水谷 いつみ著『奏でる、伝えるための楽典とソルフェージュ—保育者・教育者をめざす人たちへ—』 共同音楽出版社 2022/5/15 A4 判・100 頁 ISBN: 978-4-7785-0460-1 [本体 1,700 円+税]

幼・小・保免許資格取得を目指す学生向け教本。音楽の基本理論・ソルフェージュから現場で 사용되는楽曲への伴奏づけまで網羅している。初学者と経験者が共に学べる内容で、練習問題も充実。

★深見 友紀子ほか著『苦手意識が消える！保育士・幼稚園の先生のためのピアノ克服法』 ヤマハ ミュージックエンタテインメントホールディングス 2022/5/27 B5 判・112 頁 ISBN: 978-4636101997 [本体 2,000 円+税]

ピアノに対する苦手意識を減らす方法や楽典、読譜、効率的な練習の仕方、伴奏づけ等の基本を解説している。保育者養成機関のテキストとして最適の一冊。QR コードから読み込める参考演奏動画付き。

★城 佳世編著/八木 正一監修『たのしくできる歌唱共通教材の授業プラン（ライブ！音楽指導クリニック④）』 学事出版 2022/5/31 A5 判・168 頁 ISBN: 978-4761928520, [本体 1,800 円+税]
子どもの歌声がぐっと変わる小学校の歌唱共通教材の全授業プラン。そのまま使えるパワポ付き。

★城 佳世・田中 健次編著/八木 正一監修『今すぐできる日本の音楽授業プラン（ライブ！音楽指導クリニック⑤）』 学事出版 2022/5/31 A5 判・168 頁 ISBN: 978-4761928537, [本体 1,800 円+税]

日本の伝統音楽と中学校歌唱共通教材の解説と授業プランを掲載。子どもの実態にあわせてカスタマイズできるパワポ付き。

ニュースレターでは「会員の新刊・近刊等紹介」「会員の声」への皆様のご投稿をお待ちしております。書籍、CD、DVD などのリリースの情報がありましたら、基本的な書籍情報、音源情報に加えて「である調」90 字程度の紹介文をお送りください。

投稿先アドレス (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

5 報告

1. 2022 年度 日本音楽教育学会第 2 回常任理事会

日時：2022 年 7 月 9 日（土）13:30～16:00

場所：オンライン開催（Zoom）

出席：榎藤、有本、齊藤、今川、今田、菅道子、木村（記録）、笹野、嶋田、菅裕、杉江、寺田

【会務報告】〈2022 年 4 月 23 日以降〉（齊藤）

- 4 月 23 日 2022 年度第 1 回常任理事会・第 1 回理事会（Web 会議）
- 5 月 18 日 ニュースレター第 88 号発行（Web 発行）
- 5 月 22 日 2022 年度第 1 回編集委員会（Web 会議）
- 6 月 15 日 第 52 回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
- 7 月 5 日 第 52 回大会研究発表受理通知
- 7 月 9 日 2022 年度第 2 回常任理事会（Web 会議）

【ML での報告・審議事項の確認】〈2022 年 4 月 23 日以降〉（齊藤）

- ・「大会の発表等に関する内規」のうち、「7. 院生フォーラムの発表者は、正会員・特別会員の大学院生に限る。発表に先立ち、大会開催当日までに当該年度までの会費を納入し、大会参加費を納入すること。」の条文を内規から削除することが承認された。
- ・「選挙電子化 WG」、「資料の保存・アーカイブ化 WG」を設置することが報告された。
- ・2022 年度大会における常任理事企画・プロジェクト研究について、内容の詳細及び継続性をもって計画することが提案され、承認された。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（齊藤）

4 月 23 日以降の正会員新入会 33 名、学生会員新入会 1 名、自然退会者の再入会希望 2 名、正会員申し出退会 8 名について承認された。

（2022 年 7 月 8 日現在 正会員 1,563 名 学生会員 4 名 名誉会員 2 名 特別会員 2 名）

[資料] 新入会員・再入会員について

◆正会員 新入会員・再入会員（2022 年 4 月 23 日常任理事会以降）

正会員新入会 33 名・正会員再入会 2 名

◆学生会員 新入会員（2022 年 4 月 23 日常任理事会以降）

学生会員新入会 1 名

個人情報保護のため削除しました

2. 音楽文献目録委員会への募金について（榎藤）

音楽文献目録委員会より遡及入力 of 推進のための募金を求められている件について、現在の年間分担金 20 万円と同額を目安として募金を行うことが承認された。募金を行うことによる本学会員のメリットとして、国際版文献目録に優先的に速やかに掲載することができるとの回答を得ている。

3. 2022 年度補正予算について（寺田）

7 月 8 日現在の会員数実数を反映させた 2022 年度補正予算（案）について、今年度の事業の円滑な遂行と将来の新たな事業を見据え、当初予算を補正していることが説明され、承認された。

4. 2023 年度予算について（寺田）

7 月 8 日現在の会員数実数を反映させた 2023 年度予算（案）の説明があり、承認された。

5. 第 53 回大会について（報告も含む）

(1) 大会実行委員会より（津田→齊藤）

大会ホームページ公開、オンライン対応、大会実行委員会企画準備等の進捗状況について報告された。今後、院生フォーラムの周知、大会案内のチラシ作成と配布等、広報を積極的に行う予定。

(2) 企画担当理事より（今川・杉江）

① スケジュールについて

日程、発表件数、司会者について報告された。研究発表は口頭発表 101 件、ポスター発表 17 件で、1 日目午前と 2 日目午前に行われる。共同企画は 16 件で、2 日目の午前と午後に行われる。Zoom は 12 ルームを開設予定。

② 常任理事会企画プロジェクト研究について

- ・今後、プロジェクト研究チームのメンバーを常任理事会からの推薦（自薦・他薦）にて決める。
- ・本研究は 2 年を超える展開となる予定だが、次期にどのような形で引き継ぐか要検討。
- ・倫理審査については、学会が長期にわたって実施する研究になることから、学会の倫理審査委員会を設置する方向で検討することとなった。
- ・2 年間というプロジェクト研究の期間を終えたのちの予算措置について、検討することとなった。

(3) プログラムの進捗状況（菅）

プログラム作成の進捗状況と、今後の入稿、納品、発送スケジュールについて説明された。要旨テンプレートの「発表者名記載 1 行 1 名」のルールについては「原則」とする。

(4) 事務局より：発表申込および参加申込についてなど（齊藤）

7 月 8 日現在、参加申込者 251 名。

6. 「日本音楽教育学会細則」及び「学会賞審査委員会規定」の一部改訂に関して（嶋田・木村）

継続審議となっていた「日本音楽教育学会細則」第五章第 16 条、「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」の I 会長選挙、II 理事選挙の文言、および「学会賞審査委員会規定」第 3 条の一部改訂について審議され、総会での承認を経て決定されることとなった。

7. その他

第54回大会（北海道・東北地区担当）について、意見交換を行った。

【報告事項】

1. 第17回音楽教育ゼミナールについて（今川・杉江）

第17回音楽教育ゼミナール「リサーチ・メソッドを学ぶ」について、ゼミナール1, 2ともに申込者が定員に達し、キャンセル待ちの状況であることが報告された。

2. WG設置について（榎藤）

選挙電子化WG（座長 齊藤事務局長）と資料の保存・アーカイブ化WG（座長 杉江企画担当理事）の設置とメンバーについて報告された。6月26日に選挙電子化WG, 8月2日に資料の保存・アーカイブ化WGの第1回会議をそれぞれ開催（予定）。メンバーは下記の各会員。

- ・選挙電子化WG：齊藤忠彦, 市川恵, 菅道子, 木村充子, 山本幸正
- ・資料の保存・アーカイブ化WG：杉江淑子, 檜下達也, 嶋田由美, 塚原健太, 山下薫子

3. 韓国音楽教育学会との交流について（榎藤）

8月11, 12日に開催される韓国音楽教育学会大会に、本学会より、会長代理として菅裕国際交流委員長が出席、金奎道副委員長が同行すること、会長の招待講演は状況にかかわらずビデオ(PPT)で届けることが報告された。

4. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（今田）

第1回編集委員会が5月22日オンラインにて開催され、委員長に今田委員、副委員長に今川委員が選出された。『音楽教育学』では13本の投稿論文についての採否が審議され、研究論文2本、研究報告1本、研究動向1本が採択、研究論文1本、研究報告1本が修正再査読となった。『音楽教育実践ジャーナル』では11本の投稿原稿についての採否が審議され、特集投稿2本、自由投稿4本が採択された。7月13日入稿予定の『音楽教育学』52-1号には、研究論文2本、研究報告1本、研究動向1本、書評1本、地区例会報告が掲載される。8月5日に開催予定の2022年度第2回編集委員会では、5月15日締切の投稿原稿(研究論文3本、研究報告1本)の採否を審議する。『音楽教育実践ジャーナル』vol. 20は10月11日入稿予定。また同vol. 21の特集テーマは「ウェルビーイングに貢献する音楽教育とは」（仮称）。投稿締切は2023年2月15日。

(2) 国際交流委員会（菅 裕）

第1回国際交流委員会が6月11日に開催された。2023年2月18日に「音楽教育におけるICT：ポストコロナ時代の音楽教育（仮題）」のテーマで国際交流イベントを開催予定。ハイブリッド開催を予定している。参加費については今後検討する。

(3) 広報委員会（笹野）

ニュースレター第89号の編集を進めている。

(4) 選挙管理委員会（山本→齊藤）

第1回選挙電子化WG会議が6月23日に開催された。電子化に際し課題となる事項を挙げ、その対応と今後の推進日程について確認を行った。第2回の会議を8月下旬に開催予定。

(5) 音楽文献目録委員会（長野→齊藤）

2021年度の修論・博論調査の結果、6月17日までに70件（修論102件、博論29件）の回答を得たこと、2021年度RILM国際版に398件の文献が登録されたこと、RILMオンラインへのバナー広告を募集すること、遡及入力のために引き続き募金を募集することが報告された。

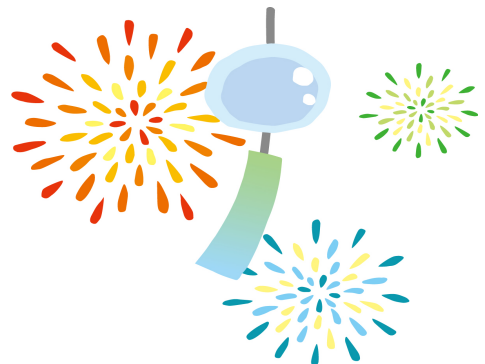
(6) 教科教育学コンソーシアム（伊藤→齊藤）

第2回シンポジウムでの笹野会員の発表資料がホームページで公開されているのでご覧いただきたい。今後は加盟団体を増やすために各学会の全国大会の情報をホームページで共有することなどを検討する。第3回シンポジウムを研究推進委員会にて進める。ジャーナル（オンライン発行のみ）がJ-STAGEで公開されることを各学会のホームページで周知することについて検討。

<次回会議の予定>

第3回常任理事会 11月4日（金）13時～14時30分 オンライン（Zoom）

第2回理事会 11月4日（金）14時30分～16時 オンライン（Zoom）



次号のニュースレターはオンラインでお届けします！

2022年12月18日発行ニュースレター第90号はウェブ版のみのお届けです。

学会ウェブサイトの「マイページ」にアクセスしてご覧ください。一般公開用は従来通りトップページからご覧いただけます。

紙媒体での次のお届けは2022年3月の第91号です。多くの会員のみなさまからのご投稿をお待ちしています。

6 事務局より

事務局長 齊藤 忠彦

1. 第53回東京大会 国立音楽大学（オンライン開催）について

- ・本大会への参加は、「申込専用 Web サイト」<https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/53ongaku/>（学会 HP よりアクセス可）での事前申し込み（参加申込〆切：2022 年 10 月 13 日（木）15 時）のみ受け付けます。当日参加は一切受け付けませんのでご注意ください。大会参加費（正会員：¥4,000）の支払い〆切も 10 月 13 日（木）です。詳しくは、「申込専用 Web サイト」をご覧ください。なお、参加申し込み後のキャンセル及び返金はできません。
- ・大会に関する最新のお知らせは、学会 HP 及び「第 53 回大会 HP」,「申込専用 web サイト」にて随時ご確認ください。
- ・総会を欠席される方は、必ず同封のハガキ（委任状）に必要事項をご記入の上、ご投函ください。
（2022 年 10 月 24 日（月）必着）

2. 年度会費納入のお願い

会費の期限内納入にご協力ください。会費未納の場合、大会での発表、送付物の受け取り、論文投稿などに支障が発生します。2 年間会費を滞納すると、会員の資格を失います。会費納入後、約 2 週間で事務局より年会費振込の確認メールが自動送信されます。メールが届かない場合は事務局までご連絡ください。

3. 会員情報（所属先・住所など）の変更について

学会からの送付物が「宛先不明」にて戻ってきてしまうことが少なからず生じています。所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会 HP「会員個人専用ページ（「マイページ」）」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

----- 【編集後記】 -----

今年は最短の梅雨期間を記録というニュースがありましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。全国の子供達にとっては楽しい夏休みが始まろうとしています。コロナ禍に負けず元気に思い出に残る夏休みにしてほしいと願いながら、NL の編集も進めています。

さて、前号（88 号）は web 配信しましたが、この 89 号は、紙媒体でお届けいたします。国立音楽大学からの大会案内第 2 報をはじめ、音楽教育の窓や会員の声については、大変興味深い内容の御原稿を頂戴しました。引き続き、皆様からの最新の情報やご意見をお願いいたします。（早川 倫子）

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座：00110-6-79672

他金融機関からの振込：ゆうちょ銀行、〇一九（ゼロイチキョウ）店、当座 0079672, 日本音楽教育学会事務局員：宇田川・亀山・徳山・若尾

※新型コロナウイルスの影響で事務局開局の状況が不規則となることがあります。ご用件はEメールでお願いします。